

松下幸之助記念志財団 研究助成

## 研究報告

(MS Word)

【氏名】 調 邦行

【所属】(助成決定時) 東京外国語大学大学院総合国際学研究所

【研究題目】 「カンボジア仏教僧チュオン・ナートの思想と行業」

## 【研究の目的】(400字程度)

チュオン・ナート(1883-1969)は19世紀末以降のカンボジア仏教の復興と興隆に貢献し、晩年には僧王に推戴された僧であり、いわばカンボジア仏教の歴史とともに歩んできた人物である。彼の行業全般を総合的かつ体系的にとらえることは近現代カンボジア仏教の歴史の流れを俯瞰することにもつながる。また、彼は内戦に向かう時代の国内情勢を冷静に見つめていた。更に、ポル・ポト体制崩壊後の仏教の再復興において既に亡き彼の影響が及んでいたことが考えられる。複雑な時代を見つめる彼の視点や仏教再復興に彼が果たした役割に光を当てることによって、現代につながるカンボジア仏教の歴史における彼の思想と行業の意義を深く理解することができる。本論文は裨益の精神に貫かれた彼の思想と行業を近現代カンボジア仏教の歴史の流れの中で捉え、そこに見える彼の基本的仏教思想を明らかにするとともに、その思想とカンボジア仏教の近代化との関係を考察することを目的とする。

## 【研究の内容・方法】(800字程度)

本論文は四つ視点をもって考察する。

## 1. チュオン・ナートの思想と行業の近現代カンボジア仏教史の中への位置づけ

チュオン・ナートは若いころパーリ語仏典の教説を分かりやすく説いて庶民に裨益することを決意した。彼など数人の比丘はまず仏教実践改革に取り組み、その後庶民への伝道に傾注し、在俗者のためパーリ語仏典のクメール語への翻訳に力を入れた。このような法施の積極化は聖俗の二元的体質であった従来のカンボジア仏教に質的変容を促した。仏教の国教化に尽力し、国教の体現に努力した彼は国情が不安定になる中で入滅するが、ポル・ポト政権崩壊後の仏教再復興にも彼の影響は及んだ。

## 2. チュオン・ナートが世俗事業である国語辞典編纂に関わり続けた根拠と辞典が持つ意義

辞典編纂はチュオン・ナートなどによってクメール語正書法の統一を目的として始められた。彼は『クメール語辞典』第5版を自らの思想の集大成とした。同辞典は国語辞典でありながら、彼の思想の結晶としての詩集・語録であると同時に、仏教を基底に持つ文献である。

## 3. チュオン・ナートの思想や行業とカンボジア仏教の近代化との関係

彼はパーリ語仏典の在俗化を進め、クメール語で教理を説いてカンボジア人の宗教的目覚めを促した。これは旧来上座仏教の二元的体質の変容、即ち質的変容である。他国での変容はキリスト教への対抗を起点として、瞑想の在俗化が進んだ。カンボジア仏教の質的変容は新仏法派僧とカルプレスの組織的活動により、大衆の現実的な苦への憐みを起点とし、瞑想より「戒」を説くことに重点を置いた。母語を基幹とする質的変容がカンボジア仏教近代化の要諦である。

## 4. チュオン・ナートの裨益の精神の仏教思想的解釈

彼が発揮した裨益の精神は仏教思想としての利他である。利他行としての法施は上座仏教では重要な徳目ではなく、従来の出家者は自己の悟りに専念した。しかし、上座仏教僧である彼の利他の精神は大乗仏教の菩薩道である六波羅密と菩薩戒に通じた。上座仏教は自利、大乗仏教は利他という一面的な見方は無意味である。

## 【結論・考察】(400字程度)

カンボジア仏教の歴史に大きな足跡を残してきたチュオン・ナートは、すべての人の幸せのために裨益の精神を貫いた。その精神は大乗仏教の要諦である利他の実践思想であり、その思想の広がりがカン

ボジア仏教の二元的体質に質的変容をもたらした。この質的変容こそがカンボジア仏教近代化の固有の特徴である。同時に、この変容は自利を第一とする上座仏教の概念を打破し、カンボジア仏教に利他の思想を吹き込んで宗教としての普遍性を高めた。そのような意味において、彼は文化的功労者や仏教実践改革者というに止まらず、従来のカンボジア仏教のあり方に根本的変化を促した仏教の変革者である。また、ポル・ポト体制崩壊後の仏教再復興の原動力は、仏教が持つ普遍性、そこに注がれた彼の裨益の精神、カンボジアの人々の厚い信仰心が織り合わされて生み出されたものである。彼の思想の価値は今日においても衰えず、行業の意義はなお失われていない。